医学と生物学 (Medicine and Biology) Vol. 163 (4): i4_Oj01, 2023

[原著]

# 助産所助産師における夫婦コペアレンティング促進のための支援の特徴

大島 璃子、中村 幸代、竹内 翔子、篠原 枝里子

横浜市立大学　医学部看護学科

## 要旨

【目的】夫婦コペアレンティング促進のための助産所助産師の支援の特徴を明らかにする。

【方法】2022 年 8 月に神奈川県内の助産所に勤務する助産師 2 名を対象とした半構造化面接を実施した。録音した面接内容を逐語録に起こし、研究目的に関する語りを抽出してコード化、サブカテゴリー化、カテゴリー化を行う質的記述的研究による分析を実施した。なお、本研究は、所属機関の学科において承認を得た上で実施した。

【結果】分析の結果、【対話を主軸とした夫婦のチーム力の向上促進】、【子どもを中心に据えた生活や家族のあり方の構築促進】、【夫婦のテンポ感を大切にした調整】、【産後の夫の育児・家事への協力度の把握】、【夫婦流の育児獲得に向けた共同探索】の 5 カテゴリーと、それらを構成する 13 サブカテゴリーが抽出された。

【考察】助産所助産師は、夫婦の円滑なコミュニケーションや互いの考えや気持ちの言語化の促進、家族の関係性を大切にした支援により夫婦関係を良好に保って夫婦の力を高め、夫婦コペアレンティング促進を支えていることが明らかになった。このことから、家族と周囲の人々との関係性の変化を捉えた家族機能構築の支援や夫婦それぞれと子どもとの良好な関係性構築の支援、夫婦それぞれの個性や考えを理解すること、負担の少ない育児方法の提案、自分たちに適した育児を見つけられるよう見守ることが必要であると考えられる。

キーワード：協働、コペアレンティング、夫婦、コミュニケーション、助産所

## 序論

厚生労働省によると、2020 年時点での日本の共働き世帯数は約 1240 万世帯と年々増加傾向にあり（1）、女性の社会進出が進んでいることが推測される。また、出産した女性労働者と出産した配偶者をもつ男性労働者それぞれの育児休業取得率は、2019 年度において女性は 83.0%、男性は約 7.5%となっている（2,3）。男性の育児休業取得率は増加傾向にあるものの未だ低水準で乳児期の夫の育児参加は妻よりも少なく、核家族化により妻が周囲のサポートを得にくくなっており、一人で育児を行っているケースが多々存在していると考えられる。

また、2022 年度に改正育児・介護休業法が施行され、妊娠・出産を申し出た妊婦や配偶者に対する育児休業の取得の個別周知や意向確認の義務化をはじめ男性の育休取得促進の取り組みの強化など、国の政策

連絡先：大島 璃子
〒 236-0004　神奈川県横浜市金沢区福浦 3 丁目 9 番地
横浜市立大学医学部看護学科

E-mail：k193219f@yokohama-cu.ac.jp

2022 年 12 月 27 日受付
2023 年　3 月 14 日受理

としても母親への支援のみならず父親と母親双方に対する支援を整備していくことが予測される。

清水は、乳幼児期における夫婦の子育てに関する先行研究において、子育てそのものへの介入よりも夫婦関係への介入の方が重要であることと、子どもとの関係性を構築する以前に妻と夫の物事の受け止め方の違いを踏まえて互いの思いを伝えあうことの大切さを示唆している（4）。また、加藤と神谷は、夫婦の子育てについて、母親からの３つの調整の方法を報告している（5）。それは、子どもへの声掛けを介して間接的に夫へ育児の促進行動を働きかけ、子どもを含めた関係性の中で夫の育児行動を促進すること、夫との関係性や夫の育児への意欲を保つために育児の不十分さにあえて言及しないこと、夫との協働育児を目指して主導的に働きうる場合があることである。加えて、三里らは、妊娠期・乳幼児期に両親が必要とする支援やニーズについて、母親は父親以外の同じ境遇にある母親も共感の対象として認識するが、父親は母親を共感しあえる対象として認識しており、夫は妻への理解と共感を促進する専門的な支援を望んでいることなど、性差による違いも報告している(6)。これらから、夫婦が互いに率直な思いを伝えて話し合えるような支援や生物学的思考の違い、夫婦での子育て調整を踏まえた個別性の高い支援が必要であると考えられ、育児をする者同士が意思の疎通や調整を図ることを重視して協力やサポートをしあいながら行う育児（7）である“夫婦コペアレンティング”を意識した支援が必要であるといえる。Van Egeren は、妊娠中の様々な話し合いに表れる夫婦の関係性は産後のコペアレンティングに影響を与えると報告している（8）。助産所助産師は夫婦に関わる機会が多く個別性の高い支援を行っていると考えられ、妊娠期より夫婦に対して育児技術面と心理面の両方から支援することで、良好な夫婦関係の保持や早期より互いの育児方針を共有することに貢献でき、夫婦が望む育児を支援することが可能になると考えられる。

本研究の目的は、夫婦コペアレンティング促進のための助産所助産師の支援の特徴について明らかにすることである。本研究の意義は、夫婦の関係性の評価・調整や、出産の準備から産後を見据えた支援を理解し、今後の夫婦コペアレンティング支援へのあり方の示唆を得ることである。

## 研究方法

1．研究デザイン

半構造化面接を用いた質的記述的研究

2．研究施設

妊娠期から夫婦に継続的に関わることができ、分娩を取り扱っている神奈川県内の助産所１か所

3．研究協力者

助産所に勤務し、妊婦健診を実施している助産師

4．データ収集期間

2022 年 8 月

5．データ収集方法

研究内容について研究協力施設の施設長に研究内容について口頭および文書で説明し承諾をいただいた後、研究施設長が選定した研究協力者に合致する２名を紹介いただいた。研究協力者に対し、研究内容について口頭および文書で説明し、同意を得た。面接は、インタビューガイドに基づき、研究協力者に半構造化面接を実施した。主な面接内容は、助産師が夫婦コペアレンティングを促進するための妊娠期から産後（主に産後入院している期間）における支援（夫婦関係の評価や調整、支援を必要と判断した際の具体的な支援方法、夫婦が今後の見通しを持ち、うまく育児をやっていけるようにするための支援）についてであった。面接は、協力者のプライバシーが保たれるよう助産所内の個室で、同一の研究者１名が１人あたり 30 分程度実施し、同意の上で IC レコーダーに録音した。

6．分析方法

最初に、録音した内容から研究協力者ごとに逐語録を作成した。次に、夫婦コペアレンティング促進のための夫婦への支援や夫・妻それぞれへの支援について着目して抽出したものを文節に区切り、研究協力者２人の類似する支援をまとめてコード化

した。その後、意味が類似・共通しているコードをまとめてサブカテゴリー化し、同様にサブカテゴリーをまとめてカテゴリー化した。また、分析結果の厳密性を確保するため、研究者間で確認した。

7．倫理的配慮

本研究は、所属大学の学科における承認を得て、所属大学の倫理的配慮チェックリストを満たした上で実施した。具体的には、研究協力施設の施設長および研究協力者に研究目的と方法、研究参加の自由と辞退の自由、拒否した場合でも不利益を受けないこと、個人情報の守秘、データの管理、データの破棄、得られたデータは研究目的にのみ使用することについて文書および口頭にて説明を行った後、研究協力の同意を得た上で同意書に署名をいただいた。

## 結果

1．研究協力者の背景

1 人目（A 氏、以下、A）は助産師としての臨床経験年数が 7 年で、そのうち助産所勤務年数は 8 か月、2 人目（B 氏、以下、B）は助産師としての臨床経験年数が 25 年で、そのうち助産所勤務年数は 17 年であった。

2．助産所助産師における夫婦コペアレンティング促進のための支援の特徴

協力者の語りを分析した結果、【対話を主軸とした夫婦のチーム力の向上促進】、【子どもを中心に据えた生活や家族のあり方の構築促進】、【夫婦のテンポ感を大切にした調整】、【産後の夫の育児・家事への協力度の把握】、【夫婦流の育児獲得に向けた共同探索】の 5 カテゴリーと、それを構成する 13 サブカテゴリーが抽出された。以下、カテゴリーを【　】、サブカテゴリーを《　》、研究協力者 2 人の語りや支援の類似点や共通点からまとめたコードを「　」、協力者の語りを「下線」で表す。また、カテゴリーとサブカテゴリーの一覧は表 1 に示す。

1）【対話を主軸とした夫婦のチーム力の向上促進】

本カテゴリーは、《夫婦間のコミュニケーションの様子を観察し関係性を理解する》、《考えの言語化を促し間接的に夫婦の問題解決力を高める》の 2 サブカテゴリーから構成されていた。

助産師は、妊娠期から継続的に「夫婦で話している様子を観察する」中で夫婦の考え方や思いの違いを理解したり、「マタニティクラスに夫も参加する場合、お産に関する考えを聞くだけでなく、妻への気遣いができているか観察」したりすることを通じて《夫婦間のコミュニケーションの様子を観察し関係性を理解する》支援を行っていた。また、「ゴールは一緒でも、そこに向かう過程がそれぞれ夫婦で考え方が違ったりとか、そういうのがあるので（中略）言葉にして伝え合うことが大事（A）」、「いろいろ話をしておくこと、イメージを湧かせることが大事（B）」と、「お互いを思いやる気持ちを持ち、感謝の言葉や労いの言葉を掛け合う」ことや、「夫婦が互いに考えを言葉にして伝える」ことを通じて《考えの言語化を促し間接的に夫婦の問題解決力を高める》支援を行っていた。

2）【子どもを中心に据えた生活や家族のあり方の構築促進】

本カテゴリーは、《長子の世話をする人や長子との関係性を理解する》、《子どものいる生活をイメージできるよう関わる》の 2 サブカテゴリーから構成されていた。

助産所の「個別性を持って 1 人の人にじっくり関われる（A）」という特徴を生かして「母親と長子の関わりや父親と長子の関係性を観察」するだけでなく、「妊産婦の身体のことだけでなく子どもを取り巻く環境を把握することができる」ため、《長子の世話をする人や長子との関係性を理解する》ことにつながっていた。そして、「児との生活や産後の体の変化、子どもの成長に関して伝える」ことや「助産所で開催している教室やマタニティクラスに参加してもらうよう促し」、《子どものいる生活をイメージできるよう関わる》ことに努めていた。

3）【夫婦のテンポ感を大切にした調整】

本カテゴリーは、《スタッフ間でアセスメントし妊婦が夫への理解を深められるように関わる》、《夫婦が互いの考えや思いの違いを感じ取れるよう関わる》、《夫婦で育

表 1. 助産所助産師における夫婦コペアレンティング促進のための支援の特徴

| カテゴリー | サブカテゴリー | 代表的なコード |
|---|---|---|
| 対話を主軸とした夫婦のチーム力の向上促進 | 夫婦間のコミュニケーションの様子を観察し関係性を理解する | 夫婦で話している様子を観察する |
| | | マタニティクラスに夫も参加する場合、お産に関する考え方を聞くだけでなく、妻への気遣いができているか確認する |
| | 考えの言語化を促し間接的に夫婦の問題解決力を高める | お互いを思いやる気持ちを持ち、感謝の言葉や労いの言葉を掛け合う |
| | | 夫婦が互いに考えを言葉にして伝える |
| 子どもを中心に据えた生活や家族のあり方の構築促進 | 長子の世話をする人や長子との関係性を理解する | 母親と長子の関わりや父親と長子の関係性を観察する |
| | | 妊産婦の身体のことだけでなく子どもを取り巻く環境を把握することができる |
| | 子どものいる生活をイメージできるよう関わる | 児との生活や産後の体の変化、子どもの成長に関して伝える |
| | | 助産所で開催している教室やマタニティクラスに参加してもらうよう促す |
| 夫婦のテンポ感を大切にした調整 | スタッフ間でアセスメントし妊婦が夫への理解を深められるよう関わる | 妊婦に対して夫の特性について尋ねる |
| | | スタッフの経験を交えて夫との関係性について妊婦と話をする |
| | 夫婦が互いの考えや思いの違いを感じ取れるよう関わる | 夫に対して妊産婦の気持ちを代弁して伝え」、「育児へ“参加する”という認識ではなく“夫婦で協力し責任を持って行うもの”という認識を持ってもらう |
| | 夫婦で育児への向き合い方を考えられるよう関わる | |
| | 夫婦が支援を必要と感じるタイミングで関わる | 支援を必要とするタイミングは産後の可能性もある |
| 産後の夫の育児・家事への協力度の把握 | 夫による育児や家事への産後のサポート状況を聴取する | 妊産婦から産後に夫が家事をどの程度やってくれるのか尋ねる |
| | 夫の子どもへの関わり方を知る | 父親の児に対する対応や育児手技を観察する |
| | 夫の背景や特徴を捉えた個性を把握する | 夫の育児や家事の不参加は、意欲があってもできない場合と意欲がないからできない場合がある |
| 夫婦流の育児獲得に向けた共同探索 | 自宅での生活を想像し夫婦のライフスタイルに合った育児ができるよう助言する | 産後の里帰りの有無や育児のサポート状況、夫の帰宅時間、自宅の設備などの情報を収集する |
| | 妊産婦の負担感を減らしながら夫と育児を行う方法をともに探す | 夫が具体的な方法で育児に参加できるようなやり方を提案する |

児への向き合い方を考えられるよう関わる》、《夫婦が支援を必要と感じるタイミングで関わる》の４サブカテゴリーから構成されていた。

夫婦そろって妊婦健診に参加することは少ないものの、助産師は「妊婦に対して夫の特性について尋ね」たり「スタッフの経験を交えて夫との関係性について妊婦と話をし」たりすることで、《スタッフ間でアセスメントし妊婦が夫への理解を深められるように関わる》ことを行っていた。加えて、「夫に対して妊産婦の気持ちを代弁して伝え」、「育児へ“参加する”という認識ではなく“夫婦で協力し責任を持って行うもの”という認識を持ってもらう」という行動を通じて《夫婦が互いの考えや思いの違いを感じ取れるよう関わる》ことと、《夫婦で育児への向き合い方を考えられるよう関わる》ことを心がけていた。さらに、夫婦コペアレンティング促進の支援について、「必要だと思うタイミングって、産んだ後かもしれないし（A)」、「気づいたときが大事（B)」という認識を持っており、「支援を必要とするタイミングは産後の可能性もある」ことを念頭に置いて《夫婦が支援を必要と感じるタイミングで関わる》よう留意していて、夫婦が育児への認識や取り組み方を把握しつつ互いに歩み寄ることを大切にし、適切なタイミングで支援をする、夫婦のテンポ感を大切にした調整が行われていた。

4)【産後の夫の育児・家事への協力度の把握】

本カテゴリーは、《夫による育児や家事への産後のサポート状況を聴取する》、《夫の子どもへの関わり方を知る》、《夫の背景や特徴を捉えた個性を把握する》の３サブカテゴリーから構成されていた。

助産師は、妊産婦への支援だけでなく、夫への支援も行っていた。特に、「妊産婦から産後に夫が家事をどの程度やってくれるのか尋ね」、《夫による育児や家事への産後のサポート状況を聴取する》支援を行っていた。また、「パパが面会に来たタイミングで（中略）基本的な育児手技みたいなものを、わからないっていう方にはお伝え（A)」し、「お父さんが面会に来てもママから（育児手技の方法を）色々伝えてくれるケースもある（A)」ことから、「父親の児に対する対応や育児手技を観察」して《夫の子どもへの関わり方を知る》ことを行っていた。また、夫のサポート状況を把握するうえで「夫の育児や家事の不参加は、意欲があってもできない場合と意欲がないからできない場合がある」と、《夫の背景や特徴を捉えた個性を把握する》ことに努めていた。

5)【夫婦流の育児獲得に向けた共同探索】

本カテゴリーは、《自宅での生活を想像し夫婦のライフスタイルに合った育児ができるよう助言する》、《妊産婦の負担感を減らしながら夫と育児を行う方法をともに探す》の２サブカテゴリーから構成されていた。

助産師が夫婦と関わる際、「産後の里帰りの有無や育児のサポート状況、夫の帰宅時間、自宅の設備などの情報を収集する」ことで、《自宅での生活を想像し夫婦のライフスタイルに合った育児ができるよう助言する》支援を行っていた。そして、「一方的に（中略）指導したところで、その人たちの生活に合わなかったりとかってすれば、何にもならなかったりする（B)」という認識があり、「夫が具体的な方法で育児に参加できるようなやり方を提案する」ことで《妊産婦の負担感を減らしながら夫と育児を行う方法をともに探す》という、助産師と夫婦の協働関係があることも明らかになった。

## 考察

本研究は、夫婦コペアレンティング促進のための助産所助産師の支援の特徴を明らかにすることを目的とした。その結果得られた５カテゴリーについて、1.家族の関係性の調整により協働の土台をつくる、2.夫婦ごとの育児観を尊重するの２つの視点から考察する。

1.家族の関係性の調整により協働の土台をつくる

助産師は、妊娠期から継続的に夫婦や子どもと関わる中で、【対話を主軸とした夫

婦のチーム力向上促進】や【子どもを中心に据えた生活や家族のあり方の構築促進】により夫婦コペアレンティングに向けた土台をつくることを行っていた。【対話を主軸とした夫婦のチーム力向上促進】について、杉、香取は、産後 2 か月の妻の夫への愛情と夫婦間コミュニケーションは妊娠後期に比べて低下し、産後 2 か月の夫婦関係には夫の育児家事参加や育児家事分担の不公平感が関係することを報告しており（9)、夫婦の関係性にとってコミュニケーションが重要と考えられる。

本研究においても、助産師は妊娠期から継続的に「夫婦で話している様子を観察して」おり、《夫婦間のコミュニケーションの様子を観察し関係性を理解》しようと努めていた。また、本研究で、助産師は「マタニティクラスに夫も参加する場合、お産に関する考えを聞くだけでなく、妻への気遣いができているか観察して」おり、父親が出産や育児に対する思いを表出することで父親自身が育児において果たす役割を認識できるよう支援すると同時に、妻への関わり方からも夫婦関係を評価していた。佐藤は、乳幼児期の障害児をもつ夫婦の育児に関する先行研究において、父親が子どもや家族の状況から自身の役割を自ら再構成して育児行動につなげることを報告している。そして、母親の役割期待と父親の役割認識が一致している場合や、両親が互いに支えて認め合い、父親に行ってほしいことを具体的に伝える場合に協働感が高まるとしている（10)。「ゴールは一緒でも、そこに向かう過程がそれぞれ夫婦で考え方が違ったりとか、そういうのがあるので（中略）言葉にして伝え合うことが大事「(A)」という語りからも、助産師は夫婦が持つ認識の違いを意識し、互いの思いを言葉にして伝え合えるよう関わっていた。

狩野は、夫婦が互いに感謝の気持ちを伝え合い、パートナーからも同様の気持ちを感じられている夫婦は夫婦関係満足度が高まると報告している（11)。助産師は、「お互いを思いやる気持ちを持ち、感謝の言葉や労いの言葉を掛け合う」ことを促すことで、夫婦が互いの関係性に満足できる状態を維持することを図っていると考えられる。助産師の《考えの言語化を促し間接的に夫婦の問題解決力を高める》支援により、夫婦が思いを言葉にして伝え合ったり互いの認識の違いを理解したりすることにつながると考えられる。そして、母親の役割期待と父親の役割認識の差を最小限にすることや夫婦満足度の向上にもつながり、産後の夫婦関係を良好に保つことに寄与すると考えられる。さらに、渡邉、樋貝は、育児を「夫婦主体」と捉える夫の方が「妻主体/夫補助」と捉える夫よりも育児協力度が高いと報告している（12)。寺見らは、父親の育児意識の変化は生じているものの、実際の育児行動にはあまり結びついていないとしている（13)。その原因として、父親は働き手（家計）の中心であるという社会の認識や長時間の労働、家事や育児に参加する時間的なゆとりがないことを挙げており、夫婦の対話によって母親・父親が担う社会一般的な育児の役割分担を超えて“子どもの養育者”として協働し、夫婦のチーム力を高めることが期待できると考えられる。

次に、【子どもを中心に据えた生活や家族のあり方の構築促進】について、助産師は「妊産婦の身体のことだけでなく子どもを取り巻く環境を把握」し、《長子の世話をする人や長子との関係性を理解する》ことにつなげていた。また、「自宅に戻った後の生活について、児との生活や産後の体の変化、子どもの成長に関して伝える」ことで《子どものいる生活をイメージできるよう関わる》ことが明らかになった。したがって、助産所助産師は、家族の関係性や妊産婦・子どもの身体面における変化、子どものいる生活における今の生活との違いなどに着目した支援を行っているという特徴があると考えられる。

Mercer は、母親役割獲得過程の理論的枠組みは妊娠期の予期的段階に始まり産褥期の形式的段階、非形式的段階、個人的段階の 4 つに分けられるとしている（14)。これに基づき、大平は、その人なりの母親としての自己像を確立することを目的とした円滑な母親役割獲得に向けた援助について、母親になる過程での両価的感情の積極

的な表出を促すこと、母親役割モデルの固定観念にとらわれず母親としての自己像をありのままに表出することを促すこと、自分にとって現実的な母親役割モデルの探索を促すこと、おなかにいる子どもを育てている場面の空想や母親になる気持ちの表出を促すことが有効であると報告している（15）。実際に、助産師は妊産婦や家族にとってのキーパーソンや周囲の人々との関係性を把握したうえで、子どもが産まれることによる妊産婦の心身への変化を伝えることをはじめとする様々な支援を行っており、母親になる実感を持てるよう妊娠期から支援していた。

また、平谷、億田、杉中、法橋は、家族機能構築の支援に関する研究において、入院する子どもをもつ家族は病児中心の生活のための役割調整を行っており、身内や友人、近所の人などの社会サブシステムに属す人々から支援を受けていることから、「家族と家族員の関係」だけでなく「家族とサブシステムとの関係」、「家族と社会との関係」など家族を取り巻く環境全体の中で家族機能の変動を捉えることが重要であると報告している（16）。助産所の「個別性を持って１人の人にじっくり関われる(A)」という強みを生かし、家族の関係性の変化と家族を取り巻く環境の相互作用の関連を妊娠期から関わる中で理解し、支援につなげることで、各家族のより良い形を構築していけると考える。Terada らは、父親の育児協力が増えることに伴い、家族全体の関係性や母子の関係性構築だけでなく、父子の関係性構築の重要性が高まっていると報告している。また、父親の育児休業取得により父親の子どもに対するボンディングが悪化することも報告しており、その関連要因について、知識不足やロールモデルの欠如による育児への自信の欠如、孤独感などを挙げている（17）。助産所では、「パパが面会に来たタイミングで（中略）基本的な育児手技みたいなものを、わからないっていう方にはお伝え(A)」することや、「お父さんが面会に来てもママから色々伝えてくれるケースもある(A)」ことから、助産師と妻が夫を支え、育児手技獲得を促す支援が育児に対する夫の自己効力感の向上や孤独感の軽減、夫婦関係の質の向上につながると考えられる。そして、育児を通じて夫が子どもとの良好な関係性を築くことも期待でき、子どもとの良好な関係性を基盤としてボンディングが促進されると考えられる。

2.夫婦ごとの育児観を尊重する

助産師は、夫婦の関係性や育児方法について理想を押し付けるのではなく、【対話を主軸としたチーム夫婦のチーム力の向上促進】【夫婦のテンポ感を大切にした調整】や【産後の夫の育児・家事への協力度の把握】、【夫婦流の育児獲得に向けた共同探索】を通して、夫婦を主体とした育児を後方から支援していると考えられる。【夫婦のテンポ感を大切にした調整】について、笠井、河原は、父親が子どもの世話を行うことができない場合でも、母親が育児に対する協働感や父親と育児に関するコミュニケーションを取れていると感じることで、夫の育児サポート感を得られると報告している（18）。本研究において、助産師は《スタッフ間でアセスメントし妊婦が夫への理解を深められるように関わる》ことと《夫婦が互いの考えや思いの違いを感じ取れるよう関わる》ことを意識していた。したがって、夫が子どもの世話をするという育児技術面での問題以前に、助産師が夫婦の積極的なコミュニケーションを促すことで、母親の心理的な満足感を高めることにつながっていると考えられる。加えて、「夫婦で来院した場合には夫に対して妊産婦の気持ちを代弁して伝えること」も行っていた。このことから、助産師は夫婦間でコミュニケーションを取るよう直接促すだけでなく、夫婦の間を仲介することで夫婦間の円滑なコミュニケーションを促す役割を果たしており、それぞれの夫婦の関係性を尊重しながら様々なアプローチを試みていると考えられる。

【産後の夫の育児・家事への協力度の把握】について、礒山は、父親役割への適応促進のためには、まずは助産師が父親も親移行の当事者であると認識したうえで、父親が子どもや父親役割についてどう捉えて

いるか把握し、支援することが重要であると報告している（19）。本研究において、助産師は《夫による育児や家事への産後のサポート状況を聴取する》こと、《夫の子どもへの関わり方を知る》こと、《夫の背景や特徴を捉えた個性を把握する》ことを通じて夫を一養育者として認識していた。育児技術面への支援の前提として夫が育児や家事で妻と協働する体制を構築するために、夫の思いや周辺の環境を捉えた支援を丁寧に行っていると考えられる。日本では核家族が増加する中で、夫の育児協力がより求められており、性別によって家庭や社会での役割を規定せず、育児を協力して行う体制づくりが必要とされている。厚生労働省によると、性役割分担意識に対する考え方の各年代の推移は、「どちらかといえば反対」「反対」が 20 代女性・30 代男性のどちらも約 7 割を占めており、結婚年齢にある男女にとって性役割分担意識への反対意見が年々増加傾向にある（20,21）。したがって、助産師の夫への支援は、育児技術面において父親としての役割を全うすることだけでなく、育児全般において妻と協働する認識を持ってもらうことを意識している支援であると考えられる。

【夫婦流の育児獲得に向けた共同探索】について、嶋岡は、生後 6～8 か月の乳児を育てる母親は、育児に対して抱く多様なストレスに直面した際、自分の子どもに適した育児を模索して実践する局面や夫婦で育児の協働を目指す局面を経ることで対処しようとすると報告している（22）。また、これらの局面に伴って母親自身の親としての成長や、育児が生活に統合され日々の生活が安定することにつながると述べている。本研究の助産師は、産前から「産後の里帰りの有無や育児のサポート状況、夫の帰宅時間、自宅の設備などの情報を収集する」ことを通じて、夫婦が自分たちに適した方法で育児を含む生活を送ることを支援していた。さらに、助産師の支援には「夫が具体的な方法で育児に参加できるようなやり方を提案する」といった助産師が主導する場面もあれば、《夫婦が互いの考えや思いの違いを感じ取れるよう関わる》ことや《夫婦で育児への向き合い方を考えられるよう関わる》【夫婦のテンポ感を大切にした調整】といった夫婦の調整の程度とタイミングを見ながら間接的に関わる場面もある。加えて、「お互いを思いやる気持ちを持ち、感謝の言葉や労いの言葉を掛け合う」ことや、「夫婦が互いに考えを言葉にして伝える」ことを通じて《考えの言語化を促し間接的に夫婦の問題解決力を高める》ことを通じた【対話を主軸とした夫婦のチーム力の向上推進】支援が行われている。夫婦が助産師からの指導や助言を基に試行錯誤を繰り返したり、様々な感情を共有したりすることで、夫婦流の育児獲得の促進、ひいては夫婦コペアレンティング促進につながっていると考える。そして、この過程は母親の成長だけでなく夫婦としての成長、すなわち親となることにより発達する個人の人格的特性である（23）親性の発達にも関連している可能性があると推察される。さらに、夫婦にとって支援が必要となるタイミングの見極めや介入の程度を判断することにおいて、助産師の成長も促されると考えられる。

3.本研究の限界と課題

本研究は一助産所に勤務する助産師 2 名を対象としており、夫が妊娠期に来院する機会が少なく、研究協力者である助産師の、夫婦二人に対する妊娠期から産褥期にかけての支援を網羅的に尋ねることが難しかったため、得られた結果に偏りがあることは否めず、一般化は困難である。今後の課題として、助産師の支援の特徴として理解を深め一般化するために協力者を増やし調査することが必要である。

## 結論

助産所助産師における夫婦コペアレンティング促進のための支援の特徴は、【対話を主軸とした夫婦のチーム力の向上促進】、【子どもを中心に据えた生活や家族のあり方の構築促進】、【夫婦のテンポ感を大切にした調整】、【産後の夫の育児・家事への協力度の把握】、【夫婦流の育児獲得に向けた共同探索】であった。助産師は、夫婦間のコミュニケーションを促進することや家族

の良好な関係性を保持する介入、夫婦のテンポ感を尊重し夫婦流の育児方法を見つけるために支えることを通じて夫婦としての力を高め、夫婦コペアレンティングを促進していることが明らかになった。そして、夫婦コペアレンティング促進の過程において夫婦が親となることも促され、親性の発達にもつながっていると推察された。

謝辞

本研究にご理解とご協力を賜りました研究協力施設長様、協力者様をはじめとする助産師の皆様に心より感謝申し上げます。

本論文内容に関連する利益相反事項はない。

引用文献

(1) 厚生労働省.2021.共働き等世帯数の年次推移.https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/20/backdata/1-1-3.html（参照 2022-3-2）
(2) 厚生労働省.2020.男女別育児休業取得率.https://view.officeapps.live.com/op/view.aspx?src=https%3A%2F%2Fwww.mhlw.go.jp%2Fwp%2Fhakusyo%2Fkousei%2F20-2%2Fkousei-data%2Fsiryou%2Fxls%2Fsh0700-02-b2.xlsx&wdOrigin=BROWSELINK.（参照 2022-3-2）
(3) 厚生労働省.2022.第 1 改正育児・介護休業法のポイント.https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/000103504.html（参照 2022-4-4）
(4) 清水嘉子. 育児期にある夫婦ペアレンティングー互いの育児の批判をめぐってー. 日本助産学会誌. 2020, 34(1), p.103-113.
(5) 加藤道代, 神谷哲司. 幼児期の子どもをもつ母親の夫婦ペアレンティング調整ー母親の語りからー. 東北大学大学院教育学研究科研究年報. 2021, 69(2), p.83-107.
(6) 三里久美子, ケニヨン充子, 岸田泰子. 地域の専門職者から提供される妊娠期および育児期の支援に関する両親のニーズと父親支援の検討. 共立女子大学看護学雑誌. 2021, 8, p.23-32.
(7) 齊藤千秋, 飯田真理子, 竹内翔子, 篠原枝里子, 中村幸代. 夫婦のコペアレンティングに関する助産師の認識と産前教育の実態および関連要因の検討. 日本助産学会誌. 2021, 35(3), p.313.
(8) Van Egeren, L.A. Prebirth predictors of coparenting experiences in early infancy. Infant Mental Health Journal. 2003, 24(3), p.278-295.
(9) 杉有希, 香取洋子. 第 1 子出生前後における夫婦関係の変化の実態とその影響要因の検討ー妊娠後期から産褥期に焦点をあててー. 母性衛生. 2017, 58(2), p.296-305.
(10) 佐藤奈保. 乳幼児期の障害児をもつ両親の育児における協働感と相互協力の関連. 千葉看護学会会誌. 2008, 14(2), p.46-53.
(11) 狩野真理. 性役割観と夫婦関係満足度に関する質的研究：妻の視点から. 龍谷大学大学院文学研究科紀要. 2013, 35, p.1-16.
(12) 渡邉タミ子, 樋貝繁香. 育児に対する夫婦の役割分担観とその役割満足度に関する研究. 山梨大学看護学会誌. 2017, 2(2), p.37-44.
(13) 寺見陽子, 南憲治. 父親の家事・育児意識と行動の変容とその要因に関する研究 ―2000 年と 2011 年のデータ比較を通して―. 神戸松蔭女子学院大学研究紀要 人間科学部篇. 2017, 6, p.119-135.
(14) Mercer, R.T. A theoretical framework for studying factors that impact on the maternal role. Nurs Res. 1981, 30(2), p.73-77.
(15) 大平光子. 産褥期の母親役割獲得プロセスを促進する看護援助方法に関する研究. 千葉看護学会会誌. 2000, 6(2), p.24-31.
(16) 平谷優子, 億田真衣, 杉中茉里, 法橋尚

宏. 子どもの入院による子育て期家族の家族機能の変動：病児の家族への半構造化面接にもとづく質的分析. 家族看護学研究. 2017, 22, p.97-107.
(17) Terada, S; Fujiwara, T; Obikane, E; Tabuchi, T. Association of Paternity Leave with Impaired Father–Infant Bonding: Findings from a Nationwide Online Survey in Japan. Int J Environ Res Public Health. 2022, 19(7), 4251.
(18) 笠井真紀, 河原加代子. 育児期間中の母親への夫の育児サポートと夫婦関係との関連. 日本地域看護学会誌. 2007, 9(2), p.75-80.
(19) 礒山あけみ. 勤務助産師が行う父親役割獲得を促す支援とその関連要因. 日本助産学会誌. 2015, 29(2), p.230-239.
(20) 厚生労働省.2020.図表 1-3-10 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」に対する考え方の推移.https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/19/backdata/01-01-03-10.html（参照 2022-11-4）
(21) 厚生労働省.2020.図表 1-1-9 婚姻年齢の推移. https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/19/backdata/01-01-01-09.html（参照 2022-11-4）
(22) 嶋岡暢希. 生後 6～8 か月の乳児を育てる母親の Mastery. 高知女子大学看護学会誌. 2019, 44(2), p.56-66.
(23) 鮫島雅子. 「母性」「父性」に類似する用語の検討 心理的側面の研究における概念規定への試み. 鹿児島純心女子大学看護学部紀要. 1998, 3,

# Features of midwives' support at a birth center to promote co-parenting

Riko Oshima, Sachiyo Nakamura, Shoko Takeuchi, Eriko Shinohara

Yokohama City University, School of Medicine, Nursing course

**Summary**

Objective: This study aimed to clarify the features of midwives' supports to promote co-parenting at a birth center.

Methods: Using a qualitative descriptive study with semi-structured interviews, interviews were conducted with two midwives working at a birth center in Kanagawa Prefecture in August 2022. The recorded interviews were transcribed verbatim, and narratives related to the purpose of the study were extracted, coded, subcategorized, and categorized for analysis. Ethical considerations were considered.

Results: The analysis showed the following 5 categories and 13 subcategories: "Promotion of the couple's teamwork skills with dialogue as the main focus", "Promotion of the construction of a child-centered life and family", "Coordination that values the couple's sense of tempo" , "Understanding the husband's level of cooperation in childcare and housework after childbirth", and "Joint exploration toward the acquisition of childcare in the couple's own style".

Discussion: The findings show that midwives support the promotion of couple's co-parenting through maintenance of good couple's relationships and smooth communication, which includes the promotion of verbalization of each other's thoughts and feelings, and the inclusion of other family relationships. This suggests that supporting the construction of family functions by capturing changes in the relationship between the family and the people around them is important. It is also important to support the construction of good relationships between each couple and their children, understand the individuality and ideas of the couple, and propose child-rearing methods that are less burdensome. This can be achieved because the midwife offers guidance so the parents can find suitable child-rearing methods.

**Keywords**: collaboration, co-parenting, couple, communication, birth center